2008 年度 小委員会活動成果報告

（2008 年　3 月 10 日作成）

小委員会名	建築一体化空調小委員会	**主 査 名**：石野　久彌 **就任年月**：2005 年 4 月
所属本委員会 （所属運営委員会）	環境工学本委員会 （建築設備運営委員会）	**委員長名**：井上　勝夫 **主 査 名**：吉田　治典
設　置　期　間	2005 年　4 月　　～　　2009 年　3 月	
設　置　目　的 各年度活動計画 （箇条書き）	建築一体化空調の設計指針の提案と建築・設備教育の提言のために、 （2005-2006 年度）　①各種建築一体化空調システムの設計事例・研究事例の収集、性能分析、②教育事例収集 （2007-2008 年度）　①事例紹介・設計法・理論に関する最新情報を発表する出版物「建築一体化空調」の具体的内容の作成・検討、②新時代の設備技術者を育てるための建築・設備教育法の提言案の作成・検討	
委員構成 （委員名（所属））	**委員公募の有無**：有り 石野久彌（首都大東京）、羽山広文（北海道大）、郡公子（宇都宮大）、猪岡達夫（中部大）、宇田川光弘（工学院大）、奥宮正哉（名古屋大）、川瀬貴晴（千葉大）、近藤靖史（武蔵工業大）、下正純（竹中工務店）、長井達夫（東京理科大）、丹羽勝巳（日建設計）、丸山純（松田平田設計）、柳井崇（日本設計）、柳宇（国立保険医療科学院）、吉牟田圭一（日比谷総合設備）	
設置 WG （WG 名：目的）		
2008 年度予算	80,000 円	**ホームページ公開の有無**：有り **委員会 HP アドレス**：http://news-sv.aij.or.jp/kankyo/s10/

項　　目	自己評価
委員会開催数	6　　回（年度内計画を含む）
刊行物 （シンポジウム資料等は除く）	なし。ただし、出版物として「建築一体化空調」をまとめることを目指し、章構成と内容の検討、最新の環境配慮手法の調査を行った。また、ホームページで審議内容を公開した。
講習会	
催し物 （シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等）	第３回　建築と設備の一体化シンポジウム　　参加者数　約 100 名 環境に配慮した建築のコラボレーション　－建築と設備の一体化－
大会研究集会	なし。ただし、オーガナイズドセッション「建築・設備のシミュレーションプログラム開発」を提案し、5 編の発表論文を得て、活発な議論を行った。
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 （当初の活動計画と得られた成果との関係）	１．学生対象のシンポジウムを計画・実施し、盛況であった。達成度は 100%。 ２．建築一体化空調に関する出版物の内容検討を継続するとともに、最新環境建築の事例調査を行った。達成度は 90%。
委員会活動の問題点・課題	東京以外の委員が多く、旅費不足の問題がある。しかし、これを活かして、札幌を初め、委員が在住する都市におけるシンポジウム開催を実施してきた。

＊　小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共

通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

＊　中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

環境工学本委員会用　自己評価欄

2008 年度 小委員会活動 自己評価

(最終年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	(A)　B　C　D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	今年度の具体的活動は次のようなもので、当初の目標を、十分に達成した。 **１．建築学生のための「建築と設備の一体化」シンポジウムの開催** 学生が建築・設備の魅力を知り、職能の理解を深めることが重要であるとの視点にたち、前年度に引き続き、学生を対象とするシンポジウムを企画し開催した。 第３回　建築と設備の一体化シンポジウム（参加者約 100 名） ・日時：2008 年 11 月 29 日、場所：工学院大学 ・　テーマ：私たちは今、何を考えるべきか －建築と設備一体化を目指した仕事－ ・内容：「第 1 部　環境に配慮した建築の仕事」は、環境建築を推進する立場として、意匠設計者、オーナーが、環境を考える建築、環境建築への想い、実現の仕方を講演し、「第 2 部　建築と設備一体化を目指した仕事に就くまで」では、多くの環境建築を設計した設備設計者が実現へのアプローチについて、また設計事務所・建設会社に入社して数年以内の設計者・技術者が、就職までの道のりと入社後の経験・実績について、紹介した **２．建築一体化空調の最新事例収集と「建築一体化空調」出版物検討** (1)環境建築事例と環境配慮手法の収集と検討 ・屋根散水、自然換気が可能で、ルーバ付きの大規模ガラス屋根をもつアトリウム建築の技術開発センターを実地調査し、ソーラーチムニー、大空間エアバランスコントロール、太陽光発電、クールヒートトレンチなどの環境配慮手法を確認した。 ・環境配慮手法の事例として、自然換気・採光・緑化・床吹出空調を利用した幼稚園、緑化・再生材・設備を見せる特徴をもつ社員研究施設、自然換気・雪冷房・緑化・ダンボールダクトを採用したメディアセンター、エアバリアを採用する窓システムを採用する銀行、ドライミストを利用する博覧会施設などの事例を収集し、設計法や効果を検討した。 (2)「建築一体化空調」出版物の内容検討 ・目次の構成、「見る」、「使う」、「学ぶ」の担当案、各章の内容量などに関して、審議を続けた。この審議成果は、来年度設置される「建築一体化設備のデザイン」出版小委員会で、出版物として具体化される。

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画･目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
  - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
  - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
  - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
  - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度

- 小委員会の活動に対し、第三者的評価･外部評価 (シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など) に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。